





甲陽軍鑑全集 卷之八

○ 武田信玄公一代弓箭合戦城攻或ハ後

武略之目記是なり

一 信玄素生

二 海野口城攻付信虎穿流

三 甲列あらし合戦乃

四 信玄公弓矢作并板垣練言の

五 信列海虎合戦乃

六 甲列あらし合戦付高子流是極迫合れ

七 甲信さくく合戦乃

八 信列平次合戦付上武田軍批判

合戦之六

九

尾河為城乃

十

大門方下合戦 付 佐竹昭非 告 後

十一

相本降系乃

十二

山本勘介之合戦

十三

流方頼茂被誅乃 付 生ん 不 付 死 并 勝 於 能

生れ

十四

山本勘介同巻乃

十五

堀尾合戦乃

十六

伊奈重武略乃 付 板垣批判乃

十七

不 為 山 登 原 村 上 三 方 内 自 を 焼 働 未 也

甲陽軍監全部抄卷之八

合戦之巻

一 信玄素出乃

大永元 辛酉年 武田信玄二十八歳の時 駿河へ歸ると云
武士今川と争ひの信玄 甲列を以て 己の意をせん
とて 駿河の人衆を引ぐ 甲列 飯田河原まで 来
り 六十余日陣とす。其時 河原一家 亂れ 陣接と
て 内家 既 滅却 せんとす。其時 河原 家 老 藤原 隆
と云 大尉の 武田 信玄 とも 争ひ 勝利 せし 故 大
將 今川 氏 討死 せし 別 勝 代 氏 合戦 せし 故 武田 信
玄 家 老 河原 氏 討死 せし 故 藤原 隆 不 也 後

五、信列執務の時、若森同十六歳の三月甲府
 へ勅使のりて大膳を兼信使とせしむ。彼を任
 へて、二方義晴より上野中務に任ぜしむ。之
 晴と云字、成之、晴信と名、系、天文廿二年
 是又勅令とあり、あり出家、始十六歳より、矢
 やまれりて、天正元酉年、二月十二日、十三歳、他、泉
 まて終、歎、小押付とせんせむ。領内乃城と一、郡
 と一、款、よと、是、始、あり、甲、列、より、八月九日、終
 他、小、と、掠、大、將、の、人、質、信、より、余、一、也、を、家、に、此
 子、此、一人、も、不出、勝、頼、乃、代、り、も、信、云、云、此、城、光、よ
 一、甲、成、ま、二、年、の、る、あ、乃、と、く、も、つ、つ、が、長、藤、に

て、と、られ、と、ん、く、よ、る、も、出、初、此、城、形、此、款、よ、つ、つ
 一、お、と、り、九、余、系、の、信、よ、く、よ、り、か、ま、り、か、り、の、い、ひ、は、
 信、云、れ、わ、り、と、ゆ、り、あ、り、て、也、一、つ、九、を、こ、る、い、ひ、と、
 の、仕、極、奥、義、は、書、ま、あ、り
 二、海、神、の、城、攻、付、信、虎、公、穿、浪、乃、り、
 天文、乙、酉、申、年、十、月、廿、一、日、信、虎、公、甲、府、と、打、互、信、列
 一、海、神、海、神、の、と、り、城、と、三、十、日、目、ま、こ、つ、事、大、寺
 左、美、高、ら、り、な、り、と、り、て、ま、た、か、り、り、可、十、二、日、北
 六、日、甲、府、へ、海、る、今、子、息、勝、信、と、ん、が、り、と、を、約、ま、さ
 かり、甲、府、へ、の、ゆ、り、び、で、は、し、海、神、の、入、り、と、り、を、執、力
 三百、む、り、と、り、子、の、人、教、ふ、と、り、を、さ、る、城、と、り、の、

たり給ふれ十六歳より信虎と戸初陣の
 此もがく也。同七戌成年四月元日信虎と晴信へ
 水置紙送るされど次男次高友へ送るはさうり。さ
 わりて同月廿日板垣信形より作つうはさうり旨
 なるを島より新元の外入して大膳大主と名乗は
 上あがり新元へ付そのいあする見をうけんのは
 不志此信成も足智は板垣との義也晴信と御
 返りよりいさをもわくも清き次男と作らる。案
 て板垣板垣使して作らる。越々島三月より
 晴信諸河へ来一由年し新學子文一紙と何あは
 しく次高友と惣領より。若くは友と若く甲

符(五)より甲よりとの模相是晴信二十八歳の時也
 同三月九日信虎諸河へ水置る。晴信を月来より一
 尺大漢来越紙より厚利御あより紙け。次高御と水
 置る。乃る甲府と水置る。板垣板垣友人と水置る
 信虎云甲府と水置る。九月十七日又送也。符と
 新元と内通り。甲府と水置る。水置る。乃る信
 置る。人質より紙を信虎云と。皆甲列へ送る
 (三) 甲列あり。晴信乃る。

天文七戌年六月信列の天竺流預後。此小笠
 原長時打参後合し。けらる。乃甲列を御晴信と
 父信虎みより。次男と惣領よきんとの紙親子中

是と云ふ歎と多邊なり。是年四月廿合戦より各々討ち
 やうらつとつる。よ。京の御堂とつり。信長將甲冑の
 取返すにまつる。西郡東郡の地下人。或ハ甲冑町
 人二十歳とつり。平定大蔵とて。去た。小田具足と
 あり。め。を。後。水。鏡。と。し。を。ゆ。の。ま。を。り。ま。の。行
 よ。長。柄。の。身。と。指。こ。も。月。打。と。り。の。り。合。合。み。子。つ。り
 ぶ。め。れ。と。り。の。て。合。戦。場。へ。と。ま。る。成。て。さ。ん。が。い
 そ。げ。さ。信。列。の。他。也。来。り。と。く。れ。戦。を。上。あ。三。度
 の。合。戦。は。三。度。な。ら。う。と。ら。れ。後。と。り。の。の。在。終。り。ま
 晴。後。の。旗。を。と。り。入。り。つ。る。と。す。れ。よ。り。後。あ。り。し
 戦。の。も。た。り。勝。利。と。り。ぬ。ぬ。の。歎。と。付。丸。を。教。子

言字十八月十九日辰の部より来り。来り。ま。て。れ。ら。う。の
 也。あ。う。さ。い。合。戦。と。是。と。り。の。軍。畢。竟。京。の。御。堂
 武略の人。信玄公十八歳ゆくり。の。勝。利。也。は。討
 小。田。發。を。う。く。と。ら。れ。て。去。也。と。り。の。京。義。法。撲。田。橋
 中。安。前。之。右。衛。門。謙。田。の。高。田。三。八。小。幡。山。城。六
 人。なり。又。今。丹。市。市。而。大。蔵。晴。後。と。二。つ。年。増。し。て
 多。比。の。在。終。り。ま。る。人。也。故。留。兵。と。り。の。志。う。と。み
 又。信。虎。公。逃。が。の。は。後。合。戦。市。而。分。別。の。と。り。左。が。も
 大。く。の。ゆ。り。但。今。年。目。の。合。戦。は。討。死。なり。又。勝。を。こ
 多。中。は。少。幡。山。城。一。入。大。剛。の。御。堂。様。子。の。三。度。乃。合
 戦。は。三。度。な。ら。う。と。ら。れ。後。と。り。の。の。在。終。り。ま

極下格。方事近世。此仕進道。と云。後。る。さ。う。く。時。信。云。三。年。も
不。立。小。の。身。の。ま。ま。に。れ。う。と。さ。う。と。云。の。他。れ。の。功。の。百。倍。也
物。と。し。ま。る。ば。う。の。ま。ま。に。腹。下。と。云。の。後。及。付。て。い。む。の。ま。ま。と。云。て。見
仕。つ。と。な。る。方。極。下。格。と。云。し。れ。後。信。云。さ。う。く。と。云。板。垣。と。云
瘦。弱。と。云。さ。う。く。と。云。流。世。紙。と。云。し。る。後。信。云。さ。う。く。と。云。天文。八。年。上
月。報。云。十九。年。此。の。時。あり。と。云。河。と。云。此。と。云。此。の。時。あり。と。云。并。り
於。右。信。の。序。文。を。小。記。至。る。也。

序

甲列賢太守。武田晴信公者。本朝射騎名家。而不墜箕
裘。武勇才藝之冠。聞于世者。久矣。雪螢之學。火牛之策。
今車胤田單也。可謂名不虛傳。遠近望風。服其威矣。
爰有一禪衲。深受太守之知。今春一錫出洛。入甲。獻壽。

於邦君。遲函有日。竊騰賢守之佳什。一編以歸。意在
說于洛下風騷諸客。可知也。蓋到康說頃斯之比。欽
介于其人。需予之序。以稱賞焉。雖謝不能。請而不允。予
凡詩道之興也。舊矣。周詩三百五。篇源于一南二雅。以
來。浸擷乎漢晉唐宋。烏吟風弄月。約花蝶葉之徒。滔々
皆是也。其餘波溢。歸吾東海。而作詩韻之淵。海為文字
之江河矣。於是縑素之流。倒詞源於三峽。水爭文充於
一天之斗。以至蟬噪蛩吟。蜂腰鶴膝之安。鉢輩出。不可
勝記。雖然。獨步作者之閭域者。古來李杜。蘓黃而已。此
四君者。諸壇無敵之騷將也。今十有七絕之佳作。後風
易俗。以為述作。本則十五之國風。二雅之正風。蔑以加
焉。又比老杜。愛幙十絕歌。老蘇。濠幙七絕詠。則足挹二

部之袂拍翰林之肩，焉豈不奇乎！且又用武事作文事也。六花偃月者，文陣也；筆陣也。紫潭清，子湯池深，去烟疑，子烽燧舉，一揮之間，智卒白刃，詞森霜鋒，百萬甲兵發於自胸中，則武庫韓白為之，卷旗戰國，曹劉為之，棄甲寸鐵不絕，千里決勝者在武田氏一將之戰功而已也。漫書士苴，贅雅葛之首云。萬年葉巢，林樹妙安子。

新正口號

又

鳥語花中管絃

淑氣未融春尚遲，此情愧被東風吹。風送鶯寒意結加，回思香雪齊前夜。飛入嫩蕊花，卷管絃。新翻一曲芳春調，數嘯黃鸝古寺前。

春山如笑

古寺看花

惜落花

新綠

薔薇

亦

簷外風光分外新，捲簾山色惱吟身。晨顏亦有蛾眉趣，綉藍無處不深紅。身上從教詩破戒，擔外紅殘三四峰。遊人亦借漁翁手，春去夏來新樹邊。尋常性癖耽閑談，庭下留春曉露濃。清香疑自昆明國，滿院薔薇香露新。風流謝傅余猶在，花似東山繹妙人。

旅館聽鶻

明月花

便面蘆間有魚

便面有雁

便面水仙梅花

便面半月照梅花

空山綠樹雨晴辰

旅館一聲歸思切

妖艷紅花出壽安

驂人要見十三葉

山色水光烟接天

丹青若馬得勝景

水綠山青飲雨初

天涯高處要通信

風送清香寂寞濱

占梅胡有弟兄約

昏月橫斜欲夜時

湖山踈影茂陵藁

殘月杜鵑呼夢頻

天涯瞻戀蜀城春

風光半月與猶殘

未在姚家黃牡丹

漁翁江上梅蘆邊

萬里風波一釣船

數行鴻雁度長虛

定可蘓卿胡地書

諸公携酒又逡巡

黃玉花開一樣春

梅花秀色似胭脂

凉水風標光祐枝

便面蘆浦白鷺

寄懷列僧

龍寶山宗依首座

是吾檀越甲列

跋其尾分下亦幸

三務季使君家譜

命賜旗曹以討負

者也以兵器至今

哉武田之為名也

詩文日課西域最

蘆葦清風垂頂絲

江南記得曾遊久

氣似波陽九月寒

多情尚遇風流客

予忘年友也一日

過予出一詩卷曰

賢使君所作也葉

巢老師序其首翁

紹况又味其素每

朝

朝

朝

窺魚白鷺水生涯

似見梨花院落時

三冬六出洒朱欄

共對士峰吟雪看

朝

朝

朝

朝

朝

朝

朝

朝

如千人が九人のいふに縛りておぼるゝと表すは我國を負ふ
まは不慮の事なりとて又中絶せしが自柄の人とて此處に
上中下の勅も御筆數に續てつゝ是れおぼしめし強がり早
國取れぬ世にありては彼友とていふ。若し又て右字の友
にありて御筆數にいらぬ。彼友とていふ。されば右字と右字に
自柄とて今川にあらざらん。若し又ていふ。彼友と
之彼友とあらざらん。されば右字と受あつていふ。彼友と
ては彼友とていふ。されば右字と受あつていふ。彼友と
結城とていふ。されば右字と受あつていふ。彼友と
わけていふ。されば右字と受あつていふ。彼友と
あり。彼人れは。されば右字と受あつていふ。彼友と
とては。されば右字と受あつていふ。彼友と

勅又答曰。少身ありて。自然百人の中に一人を存する。余は
一歳をもち人の他法。思ふと。不知強弱。舟も。舟も。舟も。
船も。船も。船も。船も。船も。船も。船も。船も。船も。船も。
の代船に。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
事ハ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
うけ。うけ。うけ。うけ。うけ。うけ。うけ。うけ。うけ。うけ。
飛。
同。
友。
人。
逃。
突。

しるるをせあつる。合戦迫合に不台親類を討たぬ大
吟と働する振ふ。越。刀。也。と。う。け。る。先。れ。を。や。成。士。千。人。小
八人の晴信の同。弱。者。弱。者。は。ま。り。の。る。劫。又。白。を。れ。は
多。少。の。義。と。し。て。い。は。河。國。を。割。取。計。も。さ。く。弱。者。計。も
う。一。も。中。一。も。士。百。人。小。八。十。人。剛。兵。も。さ。く。P。信。信。を。道
ぬ。ま。あ。つ。の。大。胆。の。沖。の。より。起。る。て。は。沖。の。と。い。ふ。所。あ。つ
ど。り。て。依。地。ま。と。る。大。將。船。と。不。知。と。さ。こ。の。ま。ま。に。下。大
小。上。下。船。と。不。知。の。に。討。つ。も。あ。つ。る。大。將。明。さ。れ。た。と。下
八。人。の。船。と。不。知。と。能。知。と。ん。ん。の。ま。ま。と。さ。く。下。大。の。船。と。ま
ま。と。し。て。い。は。の。か。も。れ。の。船。と。大。さ。う。も。い。は。の。人。小。八。十。人。も
ま。が。身。の。と。捨。多。物。を。は。く。ま。あ。つ。て。い。は。る。れ。れ。の
生。れ。知。り。と。い。合。と。は。い。は。る。あ。つ。我。小。の。を。ん。で。并。り。に。逆。攻

合戦迫合に不台親類を討たぬ大
吟と働する振ふ。越。刀。也。と。う。け。る。先。れ。を。や。成。士。千。人。小
八人の晴信の同。弱。者。弱。者。は。ま。り。の。る。劫。又。白。を。れ。は
多。少。の。義。と。し。て。い。は。河。國。を。割。取。計。も。さ。く。弱。者。計。も
う。一。も。中。一。も。士。百。人。小。八。十。人。剛。兵。も。さ。く。P。信。信。を。道
ぬ。ま。あ。つ。の。大。胆。の。沖。の。より。起。る。て。は。沖。の。と。い。ふ。所。あ。つ
ど。り。て。依。地。ま。と。る。大。將。船。と。不。知。と。さ。こ。の。ま。ま。に。下。大
小。上。下。船。と。不。知。の。に。討。つ。も。あ。つ。る。大。將。明。さ。れ。た。と。下
八。人。の。船。と。不。知。と。能。知。と。ん。ん。の。ま。ま。と。さ。く。下。大。の。船。と。ま
ま。と。し。て。い。は。の。か。も。れ。の。船。と。大。さ。う。も。い。は。の。人。小。八。十。人。も
ま。が。身。の。と。捨。多。物。を。は。く。ま。あ。つ。て。い。は。る。れ。れ。の
生。れ。知。り。と。い。合。と。は。い。は。る。あ。つ。我。小。の。を。ん。で。并。り。に。逆。攻

乃伊奈原城をとりめをふれこころなり
 一と方極垣を煮るこゆへう記を大勢うせ。晴
 佐云水身よふゆも水衣服うく。仇傍乃那代丸
 おきうゆへと後人伝より其外せりあひれ極子
 ときあめ水批判の伊奈乃竹もひらる録を
 小人教紙のうとくいそてう海りといふ物也。然ハ
 叔垣先の款を付くうんとかがり。あつあつるを
 乃理也。某塩鹿へ向いあ款と押あつるをこもて
 やりそるこそむる進款と付斗るも取らば又
 味方もうこれせうていふ計る也。相中少ハ前
 款とせり合れ君不計りすてくるをこれ之起付る

目ら進くる西此際なる戦よ。先取たよとくし事
 して乱なり。又あれた大竹の長きうく弱款小
 度十度勝るうり成る。此も柄也。味方御ま
 む款乃約きさういあ。どうと成らうとく非
 少小人教とあつる。ゆげ進もむるりとあめ終ふ
 ○十七 本曾山堂原村上三方へ水子を焼働あれり
 一塩尻あつてそく何小勝。日廿七日自入目よ格授原
 多働焼搦ひ。本多原あへも焼働のまづひる而
 小島尾村上由縣へ出るとの位をよす。仇傍
 へ油陳まうく一日遷る。日廿七日よ小縣へ向ふ。是
 と村上方堂原を死ううく返す也。相鳴信公小堂

又三日遠為のる小村上る此城跡を成八五の放火
を造り又統制人のる此城跡を成八五の放火
よりく仔細なる一物をこれより作らるる事あり
六月中旬より此陣なり

天正三十二年六月廿二日 高坂守正記之

天正三十二年六月廿二日 高坂守正記之
天正三十二年六月廿二日 高坂守正記之
天正三十二年六月廿二日 高坂守正記之
天正三十二年六月廿二日 高坂守正記之
天正三十二年六月廿二日 高坂守正記之

天正

